

目次 ■「グロテスクなトランプに凜と応じたキューバ」…2 ■キューバ政府の声明…4 ■白根全の「キューバの呪い」③…6  
■写真家 チェ・ゲバラが見た世界…7 ■松尾光の「キューバ右往左往」③…8



## 2017 キューバ友好フォーラム

9月9日(土) 13:15~16:15 開場 13:00

# 魅惑のキューバ音楽を満喫しよう

参加費 1000円(会員 500円) ★事前申し込みは必要ありません



街頭のルンバ・パフォーマン



ソンを代表するトリオ・マタモロス



1983年11月 竹村淳撮影 路上での夜間ライブ

会場 **日本記者クラブ大会議室** TEL 03-3503-2721 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル9階  
最寄り駅は東京メトロ千代田線・日比谷線霞ヶ関駅、東京メトロ丸ノ内線霞ヶ関駅、都営三田線内幸町駅、JR新橋駅日比谷口

日本人を惹きつけるキューバの魅力は多々ありますが、その1つが、その音楽です。マンボ、チャチャチャ、ボレーロ、ルンバ……誰も一度は聴いたことのあるこれらの音楽は、いずれもキューバ音楽です。

今回のキューバ友好フォーラムは、このキューバ音楽を取り上げ、その魅力の源泉をさぐるとともに、日本にいつごろ入ってきたのか、そして、日本人にどう迎えられ、愛好されてきたかを明らかにします。

キューバ友好円卓会議がキューバの音楽を取り上げるのは、2004年のキューバ友好フォーラム「有機農業・医療・教育で世界のトップを行くカリブの奇跡キューバ」、2013年のキューバ友好フォーラム「いま改めて語ろう、キューバの魅力」以来です。



## 講演 キューバ音楽と日本人

講師 竹村 淳さん 音楽ジャーナリスト / 高橋研二さん ラテン音楽愛好家

ハバネラ、ボレーロ、ソン、マンボ、チャチャチャ、パチヤンガなどなど  
キューバで生まれた音楽は、ラテンアメリカ諸国の音楽に大きな影響を与えてきた。  
そんなキューバ音楽と日本人は、どう関わってきたのだろうか。  
これが今回の講演の主たるテーマです。

竹村 淳さん(左) 1981年~05年の24年間NHK-FMでラテンアメリカとカリブ音楽のDJを務める。著書に『ラテン音楽パラダイス』、『ラテン音楽名曲名演ベスト111』、『国境を越えて愛されたうた』など。1985年に(株)テイクオフ(Takemura Officeの略)を設立。キューバのEGREM音源をCD化し紹介に努め、また数枚のアルバムをキューバで録音。83年からキューバ訪問は20回に及ぶ。現在はラテン音楽パラダイス塾を主宰。

高橋研二さん(右) 知る人ぞ知るラテン音楽シーン屈指のレコード&映像コレクター。とくに半世紀以上に及ぶキューバ音楽の膨大なコレクションはまさに貴重きわまりないお宝。現在はラテン文化サロンCafe y Librosで毎月一回第2日曜日に『みんなで、ジャズやラテン、タンゴの映画を見る会』を主宰。ラテン音楽パラダイス塾の常任講師も務めている。

★フォーラム終了後、「ゲバラ没後50年 キューバツアー」(10月5日~13日)の説明会を行います★

# グロテスクなトランプに凜と応じたキューバ

伊藤千尋 ジャーナリスト・元朝日新聞記者



## トランプのキューバ政策転換の狙い

キューバが今年の前半で最も緊張した日がある。共産党の機関誌「Granma」の電子版に野球の実況中継のような分刻みの記事が載ったのは6月16日だ。いつもはすべてが終わった時点で精査した内容を掲載する堅い新聞が、断片的な記事をこれでもかと並べた。

この日、就任して半年になる米国のトランプ大統領がキューバに対する新たな政策を発表した。場所は亡命キューバ人のたまり場「リトル・ハバナ」があるフロリダ州のマイアミだ。前任のオバマ大統領がキューバとの国交を回復し制裁をかなり緩和したのに対し、それを覆す内容である。

記事は正午から午後2時20分までに31回、トランプ大統領の動きを克明に追った。キューバ側がいかに注視していたかを物語るものだ。これを読むと、かたずをのんで見守るキューバ政府関係者の姿が目に見えよう。

- 13:25 トランプ大統領が介入を開始
- 13:50 トランプ、オバマ大統領の対キューバ政策を批判
- 13:52 トランプ、新政策を発表。基本目的はキューバ国庫への資金の流入を止めることだと付言。
- 14:00 トランプ、キューバに「より良い合意」のため交渉に動くよう要求
- 14:10 トランプ、キューバ政策の転換に署名
- 14:12 キューバ軍や情報機関が関係する企業体との取引制限が内容に記載
- ……

最初から「介入」という言葉を使って報じるなど、トランプ大統領に批判的な表現がいたるところに見られる。トランプ大統領の行動や発言それ自体がキューバへの敵視に満ちているからだ。新政策の発表の場となったマヌエル・アルティメ劇場の名は、キューバ革命をつぶそうと1961年に反革命軍がキューバに侵攻したピッグズ湾事件のさいの侵攻軍の部隊長の名をとったものだ。キューバ側は最初から神経を尖らせていた。

新たな政策は、米国人のキューバへの渡航について、家族の訪問や研究、教育、取材活動など12の渡航目的に限ることを厳格にした。ただの観光旅行は禁止される。また、キューバ軍とキューバの情報機関の傘下にある企業グループと米国企業の取引を制限した。キューバ軍への資金流入を防ぐのが目的だ。しかし、キューバのホテルやレストランの大半は軍がかかわっており、軍とのか

わりを名目にキューバの観光業つぶしを狙ったのは明らかである。

一方で、オバマ政権が2015年7月に回復した両国の国交については変更せず、再開した大使館もそのまま認めた。国交回復からの2年間に両国の間では貿易が進み、空の直行便やクルーズ船も就航しているが、それにも手をつけない。

選挙中から反キューバを露わにしていたトランプ大統領の就任で米国のキューバ政策はオバマ大統領より前に逆戻りするのではないかと危惧されていた。180度に近い大きな揺り戻しがあるのではないかと言われたが、そこまでの変化ではない。見ていたキューバ人はホッと胸をなでおろしたのではないか。

## 「圧力や脅しの下で交渉するつもりはない」



ロドリゲス外相  
2009年12月来日  
キューバ大使館にて

キューバ政府はその8時間後に長文の声明を発表した（本紙4～5ページ参照）。トランプ大統領の決定はせっかく正常化に向かっていた両国関係を再び逆戻りさせるものであると批判する内容だ。「制裁という手段はもはや時代遅れの政策であり根絶されるべきだ」と述べ、制裁の復活を激しく非難した。一方でキューバ側は「これ

れまで通り相互の対話と協力を続ける意志を持っている」と鷹揚な姿勢を示した。

3日後、キューバのロドリゲス外相は滞在先のウィーンで記者会見に臨んだ。「キューバは主権や独立にかかわることで譲歩はしない。原則を曲げてまで交渉することはないし、いかなる条件も受け入れない」と冒頭で述べた。トランプ大統領の「交渉」の誘いにクギを刺した形だ。さらに発表の様子を「冷戦の産物であるグロテスクなショーで、（かつてのキューバの独裁者）バチスタの手下が占める『寄生虫』のような一部の人間だけが回りで聞いていた」とこきおろした。

新政策を「非民主主義的な決定だ。米国民からさえ支持されまいだろう」とし、軍のかかわる企業を標的にしたことについて「政府と市民を分離させようとするのは

子どもじみている。逆に我々の愛国心や尊厳、独立心をたきつけるだけだ」と一蹴した。

自信の背景にあるのが米国の世論調査だ。「73%の米国人、63%の在米キューバ人、それに面白いことに共和党支持者の62%が経済制裁の撤廃を支持している。国交の完全な正常化を求める人々は75%で、米国人の4人に3人だ」と外相は指摘する。

「相互の利益のためキューバはなお対話を続ける意思がある。ただし平等と、我が国の独立、主権を絶対的に認めるという条件のもとに、だ。革命の歴史の中で主権と独立を譲るようなことはまったくなかったし、これからもありえない。圧力や脅しの下で交渉するつもりはない」と強気に締めくくった。

質疑の中で面白かったのは、ロドリゲス外相が、この措置はキューバ人よりも米国市民の利益を損なうと主張した点だ。「米国大統領はつねづね『米国ファースト』と言うのではないか。米国企業に活躍の場を増やし、人々に雇用を創出すると。なのに、この新政策は逆のことをしている」

外相に余裕が感じられるのは、やはり予想したよりも被害が少なかったからだろう。米国がオバマ政権からトランプ政権になってキューバ政府はかなり危険視していた。だが、国交の再断絶など最悪の事態には至らなかった。

### キューバ政策の転換は米国経済に66億ドルの損害

オバマを嫌うトランプはなぜ、オバマの政策を一部だけでも認めたのか。それは、米国自身がキューバとの関係再開で利益を得ているからだ。歴史的に米国の政策は政治的な理由よりも経済的な利益で左右されてきた。

新政策を発表する直前の米国の世論調査では、米国民の65%がキューバとの良好な関係を望んだ。両国の敵対関係を望むのは18%だけだ。国交回復以来、キューバを訪れる米国人の数は飛躍的に伸びた。昨年2月には、米国とキューバを結ぶ航空便の協定も結ばれた。この5月には観光業者約40社がホワイトハウスを訪れ、せっかく築かれたキューバとの関係を壊さないよう求めたばかりだ。

米国最大のロビー団体、米商工会議所はトランプ大統領の発表の当日に声明を出して制裁を批判した。全米外国貿易協議会などは、キューバ政策を転換すれば米国経済に66億ドル(約7300億円)の損害を与え、約1万2千人の雇用に影響が出ると警告した。これは米国の雇用を増やすと宣言したトランプ政権の公約にまさに影響する。

トランプ氏の発表後に最初にキューバを訪れた米公人はミネソタ州のティナ・スミス副知事だ。発表から6日後、ハバナで「キューバとともにできることはたくさんある」と語った。ミネソタは米国の輸出で第4位の州だ。大豆とトウモロコシが輸出品の中心で、キューバを市場として20億ドル以上の農産物輸出の可能性があるという。ミネソタ州の上院議員は今年、連邦議会に「キューバへの輸出自由化法」を提出した。

同州だけではなくモンタナ、イリノイなど農業を主とした州はこぞってキューバとの取引増加を求めている。

今年1月から5月の間にキューバを訪れた米国人は28万4565人で、昨年同期の11万6004人の約1.5倍だ。昨年1年間にキューバを訪れた米国人の数が28万4千人だから、5カ月ですでに達した。歴史の歯車はすでにまわり始めた。いかにトランプでも、その動きを止めることはできない。

私自身、昨年1月にキューバを訪れて驚いたのが観光客の急増ぶりだった。驚いたことはもう一つある。キューバ人が太ったことだ。1971年から10回以上訪れたが、国民がこれほど肥ったのを見たのは初めてだ。この国では経済事情がそのまま個人の体型に反映する。食糧が行きわたるようになったということだ。ハバナではダイエットのためのジムまで登場していた。

私が泊まったホテルもキューバ軍の経営で、やがて米国資本が入って内装のやり替えとサービス業務の転換を図るということだった。米国の政策転換でこうしたホテルはどうなるのかと心配されるが、そこはキューバのことだ。たとえば2011年から進めている民営化路線に沿って名義だけでもホテルを民間に払い下げれば、問題はクリアされる。個人の観光客が一時的に減りそうだが、受け入れが観光客の急増に追いつかないキューバの現状からすれば、かえって良かったとも言える。

超大国を相手に半世紀以上も生き抜いてきたキューバ人は、トランプよりはるかにしたたかだ。これまでどおり、今回も苦境をチャンスに変えるだろう。

### いとう ちひろ プロフィール

学生時代にキューバでサトウキビ刈りボランティアをし、「ジプシー(ロマ)調査探検隊長」として東欧を旅するなど、冒険をこよなく愛するジャーナリスト。特派員として中南米や東欧革命など激動の現場取材し、人々の声を伝えてきた。取材した国は78か国。その経験をもとに講演や執筆を行っている。

近著に『凜とした小国』(新日本出版社)『キューバ―超大国を屈服させたラテンの魂』(高文研)、ほかに『反米大陸』『燃える中南米』『太陽の汗、月の涙―ラテンアメリカから問う』『今こそ問われる市民意識』『観光コースでないベトナム』など多数。



# キューバ政府の声明

トランプ米大統領は2017年6月16日マイアミの劇場で、我が国とのあからさまな対立時代を想起させる敵対的表現に満ちた演説を行い、オバマ前大統領とラウル・カストロ国家評議会議長が2014年12月17日に、外交関係の再開ならびに国交正常化プロセスの開始を発表した後、両国が過去2年間に果たした進展を逆行させる対キューバ政策を表明した。

両国関係の逆行となる中、トランプ氏は演説に臨み“米国の対キューバ政策強化に係る国家安全保障大統領令”に署名、教育目的の個人旅行禁止、米国人旅行者のキューバへの渡航制限強化や、米国企業のキューバ軍・情報機関関連企業との経済・通商・金融取引禁止などの政策を表明した。いずれの政策も我々から収入を奪おうと意図するものである。推測に基づくキューバの人権状況及び封鎖に係る法令の厳格な施行を口実にトランプ氏はこの政策を正当化し、封鎖解除及び関係改善の条件として、我が国が国のあり方そのものを変えることを要求している。

トランプ氏はさらに、オバマ前大統領が2016年10月14日に発表した“米国とキューバの国交正常化”大統領令を停止した。当該令は米国政策の干渉的性格や我が国の経済・政治・社会秩序の変化を実現しようとする目論見を隠すものではなかったが、キューバの独立・主権・民族自決を認知し、キューバ政府を正当かつ対等な対話相手として認めるものであった。同時に、両政府間に大きな隔たりが存在する中で、文明的な共存関係が両国とその国民にもたらしうる恩恵を認め、さらに封鎖が時代遅れの政策であり、撤廃すべきであることを認めるものであった。

改めて米国政府は1962年2月から導入された封鎖措置を強化することで過去の強圧的な手法に訴えている。封鎖はキューバ国民に損害と欠乏をもたらし、我が国の経済開発にとって明白な障害となっているのみならず、他の国々の主権と利益を侵害し、国際的な反発を招いている。

キューバとの非常に制限された貿易・投資機会しか持たない米国企業セクターにとって、発表された一連の措置は更なる障壁を課すものである。

米国議会は国内社会の幅広い層からの意見を反映し、キューバへの渡航禁止措置の廃止のみならず、通商上の制限を撤廃するよう求めている。そのただ中であって、すでに差別的なライセンスの使用義務を課されている米国民にとって、わが国を訪問する権利はこれらの措置によってさらに制限されることになる。

トランプ大統領の発表は、キューバ人移民を含めた米国内の世論の多数派が支持する封鎖の全面撤廃やキューバと米国の関係正常化と矛盾する。

一方、米国大統領はまたもや誤った助言を受けた結果、キューバとその国民が自由に生きる正当な権利と主権を行使し、自国の運命の主導権を握っているが故に、罰を加えんとする意図を浅ましい動機により放棄しようとし、フロリダ州のキューバ系過激少数派の政治的利益を優先させる決定を下した。

後ほど、この発表の範囲と意味合いについてさらに深く分析する。

キューバ政府は新たな封鎖強化政策を非難する。繰り返された過去の事例と同様、その失敗は明らかであり、ほぼ60年の長きに渡りあらゆる種類・由来の攻撃に対し抵抗を示したキューバ国民を屈服させ、革命を弱体化させるといった目的を達成することはできないであろう。

キューバ政府は政治目的の工作や人権問題を扱う上での二重基準を拒否する。キューバ国民は基本的権利や自由を享受しており、医療や教育、社会保障の権利、同一労働同一賃金、子どもの権利、食料や平和、発展の権利など、米国を含む世界の多くの国にとって夢のような、キューバ国民が誇りとする成果を堂々と示している。封鎖対象国という状況に伴う制限にもかかわらず、キューバはそのささやかな資源を活用し、世界の多くの場所で人権状況の改善にも貢献してきた。

米国は我々に教えを説く立場にはない。米国内における人権尊重・保障について、我々は深く憂慮している。同国では殺人や暴力行為、特にアフリカ系住民に対する警官の暴行事件が多発している。発砲による死亡事件の結果、生命権が侵害される。児童労働による搾取、人種差別の横行。医療サービスの制限を強め、2300万人が無保険に陥りかねない。男女間の賃金格差、イスラム系をはじめとする移民・亡命者の排斥、隣国を侮辱するような壁の建設を目論み、環境保護と気候変動対策に関する国際的な約束を反故にする。

米国による他国での人権侵害も同様に憂慮の種である。不当に占拠しているキューバのグアンタナモ米海軍基地において囚人数十人を恣意的に拘束し、拷問すら行った。裁判外の処刑、民間人の爆死、ドローンの使用。イラクに対して大量破壊兵器の保有を理由に攻撃したように、偽りに基づき複数の国々に戦争を仕掛けた。その結果、中東地域の平和・安全・安定に悲惨な結果をもたらされた。

キューバは人権に関する44の国際文書の締約国であるが、米国は18文書の締約国にしか過ぎないため、わが国はより多くを証明し、意見を述べ、守るべき立場である。

キューバと米国の国交回復が決定された後、国連憲章に謳われた原則と目的に基づき、両国の国民と政府は相互尊重と協力の関係を発展させるという意思を確認した。2015年7月1日の声明でキューバ革命政府は次のことを再確認した。「この関係はわが国の独立と主権に対する完全な尊重、すべての国が有する不可侵の権利であるところの、いかなる形の干渉も受けずに政治・経済・社会・文化制度を選択する権利、そして国際法上の放棄できない原則を構成する主権平等と互恵、これらを土台に築き上げられなければならない」。キューバの首都ハバナで開催された中南米カリブ海諸国共同体（CELAC）第2回首脳会議において、参加国首脳や政府が調印した平和地帯宣言にもこの内容が盛り込まれた。キューバはこれらの原則をこれまででも、これからも決して放棄しない。

キューバ政府は相互の関心事項における敬意ある対話と協力や、米国政府との懸案事項の交渉を引き続き行う意向があることを改めて表明する。ラウル・カストロ国家評議会・閣僚評議会議長が繰り返したように、両国は互いの違いを尊重しつつ、両国とその国民の利益につながるあらゆる事柄を推進し、文明的に協力し共存できるということがこの2年間で証明された。とはいうものの、キューバがそのために主権や独立に関して譲歩し、何らかの制約を受け入れるなどと期待すべきではない。

キューバの政治・経済・社会体制を変えようとする戦略は、たとえ圧力や強要、あるいはより巧妙な手法を通じて試みようとも、いずれも失敗に終わる運命にある。

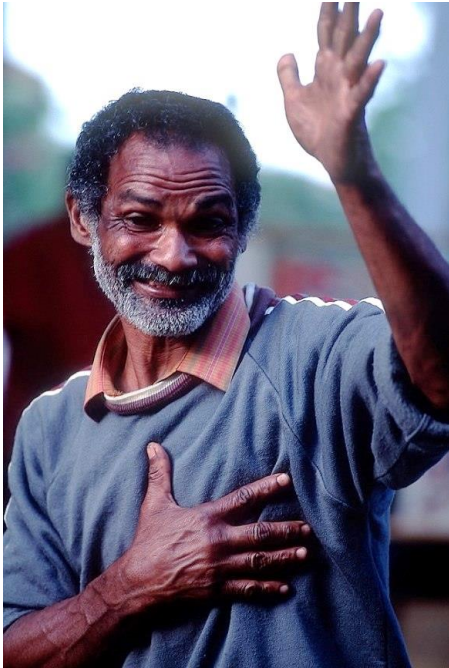
キューバが必要とする諸変革については、1959年から実施し、現在も経済・社会モデルの更新プロセスの一環として取り組んでいるように、キューバ国民が主権の下、引き続き決定していく。

1959年1月1日の勝利の日から行ってきたように、我々はいかなるリスクがあろうとも、主権を有し、独立し、繁栄し、持続可能な、民主的な社会主義国家の建設のために引き続き断固とした確信を持って進んでいく。

2017年6月16日ハバナ

自根 金の  
キューバの呪い ③

# 「世界中の富を積み上げても キューバ人のプライドは買えない」



## 野良犬の自由

取材仕事と撮影を適当にこなしながら、崩れかかった旧市街の通りを歩く。やみくもに歩きながら、方向感覚と勘を研ぎ澄ましていく。身体を包む大気は重く蒸し暑いが、海から吹きこむ風はさわやかで足が軽く宙を滑る。ふしぎな浮遊感だ。

歩きまわるに連れて、次第にこの国が、というかヘンな空気がじわじわと取り囲んでくるのが感じられてきた。社会主義圏特有の効率の悪さ、サービス精神の欠如、どうにも融通の利かない官僚体質、などなど、あげ始めれば切りがない。

つまりは建前最優先というヤツで、どこかしらソ連の影が漂う。空席だらけでがらがらのレストランに並ぶ行列。薄暗い配給所に半日間でも立ち尽くす人々。投げやりに対応するホテルの従業員。まったく仕事する気配のない役所の担当……。

誰しもが諦めたような表情をしながら、しかしまた同時にあきれほど明るいのはなぜだろうか。そして、どこに行っても誰と会っても、そこには必ずフィデルの存在が影のようにつきまとっていた。イデオロギーとはまた離れた、なにか別の原理が働くように、だ。

国家元首、独裁者、革命家、指導者、つまりキューバ共産党第一書記であり革命評議会議長、革命軍最高司令官、

権力のすべてが彼一人に集約する。しかも、どこの誰よりも愛されている。そもそも、国民が独裁者を「フィデル」とファーストネームで呼ぶ国があるだろうか。権力の頂点に君臨しながら、これほど民衆との距離が近い存在は聞いたこともない。強いられることなく、これほど慕われている権力者がいただろうか。銅像ひとつない。自ら、不要な偶像崇拜を法的に封じてしまったのだ。

国是として平等を律義なまでに追求しようとするキューバは、やはり特殊な例なのだろうか。もはやとっくに手垢まみれになっていたはずの「体制」などという言葉が、この国では大きな顔で人民を仕切っている。あらゆる場面に政治がコミットする。政治から決して逃れられない運命に、大気中の微粒子までフィデルの息遣いが漂っていた。

しかし、それは大した重みではない。人々はバカのように笑い、ストレートに怒り、感情を隠すことを知らない。議論が始まれば、政治ネタであれ遠慮なく怒鳴り合う。辛抱強く行列に並び、文句は言っても幸せそうにお喋りを続ける。建物は傾き、雨が降れば街路は文字どおり川と化す。壊れた雨どいから滝のように落ちる雨水を頭に受けて、笑い転げる子供たちの嘘いつわりない健康さが、ほかの途上国とは際立って違う。社会主義とは貧困の分配である、と解説されてきたが、ここはもしかすると例外中の例外だろうか。世界の辺境のさらに極北なのか。

それにしても、野良犬の生活の悲惨なこと。

「キューバで自由に生きるってことは、疥癬まみれで暑さに喘ぐ道端の犬になることさ」

道端で暑さに呻いている野良犬の写真を撮っていたら、いきなり後ろから話しかけられた。ただの不良っぽく見える。どうにも私服警官や秘密警察には見えないすさんだ風体が、精一杯の自己主張らしい。短い半袖から左腕に彫られた十字架のタトゥーがのぞいている。長くのびた髪もキリスト風か。

「確かにこの国では医療も教育も無償だ。食料も最低限は配給で手に入る。年に2枚シャツが配給される。10歳まで誕生日には国からバースデーケーキまでもらえる。でも、それは何も選択できないってことでもある」

言いたいだけいうと、男は背を向けて瞬間に姿を消した。何も選べない国——。本当にそうなのだろうか。選ぶどころか、まったく手にできない国だっていくらでもある。少なくとも飢えて死ぬ恐怖、病に蝕まれ苦しむ恐怖を忘れて暮らせるのはありがたいことではないのか。

道端で生まれ死んでゆくホームレスや学校に行けないストリート・チルドレンなんて、世界中どこに行ったらいいやというほどお目にかかれるぜ。聞いてみたいことはたくさんあったが、十字架のキリスト男は足音さえ残さず消えてしまった。

人々の本音を知りたい。いくら建前が先行していても、本音はどこでもまた別の文脈で語られるものだ。怪しい英語で話しかけてくる自称ガイドや葉巻売りのあんちゃんから、UJC（共産主義青年同盟）の幹部やCDR（革命防衛委員会）のリーダーまで、出くわすさまざまな人々に本音を問いかけてみた。

もちろん職業や立場で、答えもそれぞれ、反応は千差万別。加えて、なるほど異様なまでにプライドが高い。「世界中の富を積み上げてもキューバ人のプライドは買えない」という諺があるぐらいで、根拠のない自信に充ちあふれている。

ただ共通するのは、ややもすれば狭い世界に生きている、という感じだろうか。かといって、極端に偏っているわけでもないし、全体のレベルはけっこう高いことがうかがえる。とりわけ、革命前を知る老人たちの話はおもしろい。

テラスのロッキング・チェアを揺らしながら通りを眺めるだけの老人たちが、カーニバルの季節が巡ってきたとたんにシャキッと踊り出すのは、革命前も後も変わらぬハバナの風物詩だったようだ。

「革命の後もカーニバルになると、海沿いのマレコン大通りにあちこちの職場チームのコンパルサが次々に出てきたもんだ。とくに、70年代の終わりから80年代の初めは社会主義なんか知ったこっちゃないとばかりに気合が入っていたもんさ」

マレコンのパレードで最強の砂糖公団を筆頭に、宿敵の工業省や漁業省の山車が登場しては豪華さを競い合った時代だ。

「見物客がマレコンからこぼれ落ちそうになるほどの人出で、パレードの最中に仕掛け花火が燃え移って火事になった山車を観客が総出で海に投げ込んだこともあったなあ。カーニバルの間はビールからラム酒やサンドイッチも配給になって、老若男女みんなが心底楽しんでいたもんだよ……」

まさしくキューバの呪いに絡め取られた瞬間だった。カーニバルをこの目で見なくては、その現場に立ち合わなくては、かくして、先の見えないキューバ通いは自動的に始まってしまったのであった。（続く）

しらね ぜん

日本で唯一、世界中でも2人しかいないカーニバル評論家、ラテン系写真家。東京出身。青山学院大学卒。仕事（撮影取材調査渉外観察記録編集企画制作など）その他（探検冒険踏破潜入縦断横断登攀釣魚沈没など）さまざまな理由で現地に入り浸っている。人類400万年の旅グレートジャーニーのサポート、コーディネートも担当。これまでに訪れた国は、6大陸、150カ国超。ラテンアメリカとカリブ海域の主なカーニバルはすべて制覇。定点観測と路上観察を続けているキューバは、1989年以来、30回目の訪問をマークした。



## 写真家 チェ・ゲバラが見た世界

8月9日（水）～27日（日）11:00～20:00

恵比寿ガーデンプレイス ザ・ガーデンルーム

〒153-0062 東京都目黒区三田1丁目1-13-2  
TEL 03-5423-7111

JR「恵比寿駅」東口から動く通路「恵比寿スカイウォーク」で約5分。雨の日でも傘なしで濡れずにアクセスできます。

没後50年、チェ・ゲバラは何を見つめ、  
夢を見たのか

自身が撮影した写真、約240点を日本初展示

平和と平等をもたらすために戦った

チェ・ゲバラの傍らには  
いつもカメラがあった。

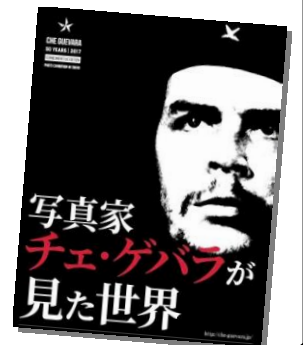
彼は何を成し遂げ、  
何を夢見ていたのか？

世の中が転換期を  
迎えようとしている今、

チェ・ゲバラが

ファインダー越しに見た世界を  
体感する展覧会を開催。

彼の息子カミーロ・ゲバラ氏の  
全面協力により「チェ・ゲバラが自身で撮影した写真」、  
約240点を日本初公開する。



## 7月、日本語講座1年終わる

講座開講1年が終わる。プロジェクトは期待どおりの進展と、相変わらずの課題が交錯している。1月から順に出来事や感じたことをお伝えしたい。

### 1月

日本語講座の教室が使えない事態になっていた。事前に私に伝えてほしかった。

ハバナへ — 出会いが4、5月の活動へ

【賀詞交歓会】



渡邊大使（右）と日系人会の幹部の方とで鏡開き

在キューバ日本国大使館の賀詞交歓会に招待をうける。日系人、日本食堂の主人、商社、JICAなどの40人ぐらい。渡邊優日本大使ともじっくり話して、サンクティ・スピリトゥスの活動を理解していただいた。昨年に安倍首相がキューバへ来られた際、日系人（1100人おられる）代表の方にお会いになり、キューバで日本との懸け橋になってほしいと頼まれたことで盛り上がっていた。

JICAの援助調整専門家の小林様といろいろお話しをした。これから何回もお会いすることになる。企業の進出の様子を把握するよい機会だった。また豊田通商の小林様とも会い、後に親交を深める。

### 2月

心温まる話 — でも5月に思わぬ破局が

心温まる話を聞いた。私がキューバへ行くきっかけを作っていたいただいた円卓会議にも何人かおられる1970年代に3回実施した、日本からキューバへのキビ刈り部隊の後日談。

キビ刈り後のキューバ残留組の中に、キューバに剣道を伝えたいと思った安藤昭治さんという方がおられる。安藤昭治さん



ギジェルモさん、奥さん、日本武道愛好家たち

は44年前、1年半農場で働きながら剣道をサンタクララで指導なさった。その一番弟子の方が亡くなる前に「キューバに剣道を教えた最初の方は安藤先生であることを証明するように、本を出版してほしい」と言い残した。なんとずっと剣道、合気道の指導を続けておられる孫弟子にあたる方が（ギジェルモさん）が、今も本を執筆中で、サンタクララにおられた。

2月26日サンタクララへ行き46年の思いを存分に聞く。キューバ人を見直す1日だった。これを契機に日本語講座サンタクララ講座が始まる。ところが、日本語講座サンタクララ講座は5月に破綻する。

サンクティ・スピリトゥスに日本人旅行者

日本人旅行者が初めて私の授業を見学。親交を深める。かなり旅行通の女性。南米やインドをバックパッカーで旅したそう。よく聞くとキューバで



大学での講座、日本人旅行者と

ビジネスの種がないかと見に来たとかで、並みの旅行者とは一味違った。案内のノウハウを取得したので皆様、是非サンクティ・スピリトゥス訪問の検討を願う。

### 3月

大学に日本語講座専用教室ができた。使わないときは他の講義に使うが優先して使える。大学での日本語講座の認識が少しずつ高まる。

日本語講座の進捗

いよいよ動詞の活用や、形容詞副詞の使いかたへ。専用教室ができ落ち着いて進められる。一方のグアイアベラの教室は環境が悪い。雑音が多く集中できないので、5月に民宿に場をかえる。学習者については、やはりと言うべきか講座の出席率が悪く悩まされる。キューバの大学は単位



制でない。学科で期末試験があり、それによって進級を判断する。学科に関係ない科目は卒業に無関係。

日本語学科はハバナ大学にもなく、学位とは無関係だ。優先順位が低いので、難しいまたはつまらないと簡単にやめる。30人いた学習者が17人になる。でもこれはハバナ大学でも同じと聞き、気を持ち直す。

### 旅行者が増えた弊害がじわりと

またハバナへ行く。いくたびに旅行者がふえている。残念だが旅行者の金を目当てにぼったり、だましたり、お金をとったりするキューバ人が増えている。よきキューバが少しずつ失われていく。

実は私も、いままでだまされていたことに気づく。都会ハバナでは特に細心の注意が必要。残念だ。タクシー、食事、観光で正規の料金がなくて観光客はいいなりになると、何倍も払わされる。私は値切る交渉がいやなのだが、絶対に必要だ。キューバ人は現金を得る手段がないのだ。へたすると10倍くらい違う可能性がある。ストレスだ。

無知な旅行者を狙う行為はやめてくれないかと願うばかりだ。でも、ますます増えているようだ。そして田舎のサンクティ・スピリトゥスでも、ついにぼるタクシーにあった。のどかでのんびりとしてまじめなキューバ人の印象をこわすようで残念だ。

5月

### 日本文化週間

#### 渡邊大使、サンクティ・スピリトゥスに来る



私が教える日本語講座の教室に大使がこられた

日本文化週間が5月25日から28日までの日程で行われた。在キューバ日本国渡邊優大使が来られた。お会いするのは3回目だ。渡邊大使は、キューバのすべての県を回る予定で日本とキューバの友好を図っている。



学長と学部長（ともに女性で若い）

大使と同行して大学学長と学部長から説明やもてなしを受けた。大学学長と学部長

は、私の日本語講座講師の活動を評価して大使へ報告していただいた。大使も、日本大使館と日本語を教える私は一体だと大学の学長や学部長に言ってくださった。

大使は、グアイアベラの家に来られて挨拶した時も私を紹介してくださった。全権大使となると存在感が違う。キューバの方が皆、敬意をもって接したし、私の活動の大きな支援となったと思う。大使が来られた効果。これからの活動のため、私に講師室の利用と専用の机と椅子が用意された。ここまで1年かかった。

### 悲しい出来事 離婚が引き金

前に書いたようにサンタクララの日本語講座が突然中止となった。4時間かけて買ったバスの券（1枚75円）が無駄になる。原因はギジェルモさんの離婚。教室として使っていたご自宅が使えなくなったためだ。とても仲がよさそうにみえたのに残念だ。

離婚の話はこれで5人目。ほんとうに多い。キューバでは3回目の結婚でほんとうの愛にふれると知っている。6月4日に荷物を取りに行った際に、ギジェルモさんに最後に会った。幸いに日本への思いは変わらないうだ。

6月

### またハバナへ

ハバナ大学の先生、JICA、豊田通商のかたとお話しをした。ハバナ大学の日本語の先生に、日本語教育についてアドバイスをうける。JICAの小澤所長、小林専門官、豊田通商ハバナ駐在社長とキューバでの仕事の話をお聞きする。

#### いくつかエピソード

1. キューバへ車を売るときは800%の関税がかかる。10月に豊田通商は事務所開きする。
2. ハバナ大学に山田芳子さんという若い日本語教師がおられる。エイムネクストという企業が社会貢献事業で派遣している。
3. 商社日立ハイテクが受注した発電所のリニューアルはキューバの都合で止まっていて、日立製作所は30人の技術者待機で損害を出している。

7月

### 1年の終わり7月最後の試験を行う

いままで続いた学習者は結局17人。70点以上合格とした。現段階で70点以上11人。69点以下5人だ。残る1人の学習者（大学教授）は、試験日に医者の娘さんが国際ミッションで海外に行く見送りのために欠席し、私の帰国前々日に受験する。落第点は追試を行い救済する。



サンクティ・スピリトゥス大学にて、1年最終試験

エピソード：突然試験の点が30点以上も上がった学習者が3人いた。実は優秀学習者が、私の講義がわからなかった学習者にスペイン語で教えていた成果だった。私の日本語だけの講義は優秀者しか理解できていないことがわかり、スペイン語を話せない限界を感じる。でもこの輪を広げればみんな90点が取れる期待もある。そして講座継続の芽が見える。

### 9月の新学期にむけて

熱心で優秀な学習者が2名おりアシスタントが期待できそう。そして新入生も20名ほどあつまって、少し形ができてきた。講師は私1人なので倍の講座を消化しなければならない。体力勝負だ。実は国際交流基金のアドバイスで教科書を変えた。またあたらしい資料を作らなければならない。でも当初の懸念3年目を以降も継続できる形を作ることは解決していない。

### 番外編

### 異次元の世界キューバ

トランプ大統領の流れに逆行する演説があった。その時感じたこと。アメリカ国交回復で変わったのか。1年暮らした印象で答えはNOだと思う。アメリカの国交断絶や経済封鎖が改善されれば、たしかに影響は大きいですが、キューバ内の体制制度の問題なので一般市民の生活は変わらない。学習者を見て、キューバ人のほとんどがキューバを出たいと思っているのを肌で感じている。

革命から58年、国内の変化が求められていると思う。共産党一党独裁が続く限り変わりそうもないが、将来へ向けて、批判ではなく、変えるべきと感じた点を3つあげたい。

- ① 政府業務を効率的に、国民が望む変革を認める仕組みを。
- ② キューバ人の海外渡航を自由に。
- ③ 働いたら相応の現金を得られる仕組みを。9割以上は年収7,8万以下の人達

キューバ人は「これがキューバだ。しかたがない」と諦めきっている。



サンクティ・スピリトゥスに住んでいる元巨人軍セベタ氏がイベントに参加。渡邊大使、島田書記官とともに



グアイアベラの家の学習者達。私の誕生日を祝う

### まつお あきら

日本経済新聞社でIT技術者として30年近く勤務。2016年3月に退社後、仕事とは無縁なキューバ行きを決めた。その経緯は、今から25年前に父親の松尾威哉さんがバナ大学に日本語講座を開設したことにさかのぼる。詳細は本紙21号(2016・4・4発行)

11ページのBOOK『キューバの光と影 — ボランティア日本語教師3年の記録』参照。



### キューバ友好円卓会議への入会・カンパ随時受付中♪

キューバ友好円卓会議は、「キューバとの友好推進」、「キューバに関する情報交換と情報発信」を目的に2003年に設立され、年1〜2回、フォーラム、シンポジウム、講演会などを開催。そのほかハリケーン災害の支援活動、キューバツアーなども行っています。事務局スタッフは全員ボランティアです。

会報『サルー!』の読者約600名

■年会費：3000円

**どなたでも入会できます**

お問い合わせはFAXかe-mailで下記へ

キューバ友好円卓会議 FAX 03-3415-9292

e-mail cuba.entaku.0803@gmail.com

郵便振替 00100-9-499950 キューバ友好円卓会議